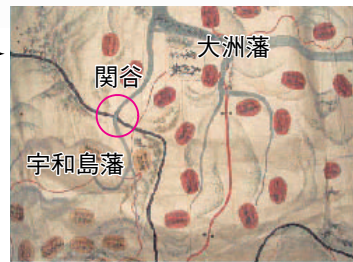


くに境→



関谷周辺の古地図（「伊予一国之絵図」  
（大洲博物館保管）の一部、加筆）

## 背景

この話は、大洲市を流れる肱川の支流久米川の流域が舞台となっています。久米川は、大洲城の下流で肱川と合流しています。江戸時代には、久米川の流域は、上流が宇和島藩、下流が大洲藩の領地でした。しばしば、渇水になることがありましたが、両領民は久米川の水を分け合い、どうにか渇水を凌いでいました。この境界にあたる関谷は、両側から山脚が迫り、宇和島藩と大洲藩を分けていました。

## アクセス

水争いを記録した石碑のある圓滿寺

- JR西大洲駅より西へ直線距離約200m
- 大洲市阿蔵
- 緯度経度 北緯33度30分27秒、東経132度31分25秒



ある年、大変な日照りが続いて、田んぼの稲は枯死寸前こしすんぜんという事態おちいに陥りました。こうなると、水の一滴は血の一滴です。水を惜しんだ久米川上流の宇和島領の農民は、川の流れをせきとめて、大洲領へは流れ込まないようにしてしまいました。困ったのは下流の農民です。水を分けてくれるようにと、たびたび掛け合いましたが、だめでした。なにしろ、死活に関する問題ですから、事がおだやかに済むはずがありません。おきまりの水争いとなり、けが人が出る騒動も絶えません。

このことを知った大洲の殿様は、「これほど大洲領の農民が難儀なんぎをしているのに、水を分けてくれないというのなら、今後宇和島領の水は一滴たりとも大洲領には入れさせない」と、さっそく、関谷地区に大きな土手を造らせました。この土手が出来上がったときに、奉行がその様子を報告しますと、殿様は、わざわざこの土手の出来ぐあいを見に来られて「なかなかよく出来た。これならば、水は一滴ももれないだろう」とおっしゃりながら、手にしていた竹の杖を地面に突き立てられました。

その後、次第に雨も降りはじめましたが、今度は弱ったのが上流側の人達です。何しろ、関谷地区に大きな土手を築いて、水の流れをせき止められたものだから、水のはけ場がありません。川を溢あふれた水が次第に溜まって、村全体が水没してしまいそうです。いまさらのように驚きあわてましたが、どうにもならないので、とうとう大洲の殿様にお詫びをし、今後はいつさい川をせき止めたりはいたしませんという約束をして、土手をとりのけてもらいました。

このあたりの竹は、大洲の殿様が堤防に突き立てた竹杖から根を出し、次第に茂ったものと言われている。殿様が竹杖を逆さまに付きたたてたものだから、この付近の竹はみな枝葉が逆さまに出ているのです。